

# いきいき茨城ゆめ大会選手団サポートボランティア の育成と代替ボランティア活動に関する実践報告

矢嶋 敬紘\*・沼田 世里\*・上地 勝\*\*・西川 陽子\*\*

(2020年11月9日 受理)

## The report about educational project in Ibaraki University through bringing up support volunteers of national sports festival for people with disabilities and substitute volunteer activities

Takahiro YAJIMA\*, Seri NUMATA\*, Masaru UEJI\*\*, and Yoko NISHIKAWA\*\*

(Received November 9, 2020)

### Abstract

This paper reports educational project through bringing up support volunteers on national sports festival for people with disabilities held at Ibaraki prefecture in 2019. In fact, the tournament was unfortunately cancelled by the typhoon, but preparations such as education for students to support disabled took about two years, and some students did substitute volunteers for the tournament and it was suspected that they were grown up mentally from discussion and worksheets in briefing session held after volunteers. From these facts this report also prospects educational potential of peer supporter for university students.

キーワード : support volunteer, peer supporter, 全国障害者スポーツ大会、人材育成、大学教育

### 1. はじめに

2019年、45年ぶりに茨城県では国民体育大会(国体)が開催されることになり、茨城大学においては特に障害者スポーツ大会「いきいき茨城ゆめ大会(第19回全国障害者スポーツ大会)」における県からの要請を受け選手団サポートボランティアを主として協力参加した。

まずは、国体における障害者スポーツ大会の歴史とその位置づけについて概説する。国体は、1924

---

\* 茨城大学全学教育機構 (〒310-8512 水戸市文京 2-1-1 ; Institute for Liberal Arts Education, Ibaraki University, 2-1-1 Bunkyo Mito-shi 310-8512 Japan)

\*\* 茨城大学教育学部 (〒310-8512 水戸市文京 2-1-1 ; Department of Education, Ibaraki University, 2-1-1 Bunkyo Mito-shi 310-8512 Japan)

年(大正13年)に東京・明治神宮外苑競技場の完成を記念して開催された明治神宮競技大会を引き継ぐものであり、第2次大戦により一時途絶えたが、終戦後はかなり早い段階で国民の体力向上や地方スポーツの振興と地方文化の発展に寄与することを目的として、1946年(昭和21年)に現在の国体の実質的な第1回大会が開催された。その後は各都道府県で持ちまわる開催様式となり、都道府県対抗の形となって国内最大のスポーツの祭典として発展した。そして、2001年の第56回大会より本大会終了後に続く形で全国障害者スポーツ大会が開催されるようになり、現在は1~2月に行われる冬季大会(冬スポーツ)、9~10月に行われる本大会(陸上、球技ほか)とそれに続く全国障害者スポーツ大会の3大会により構成されている。障害者のスポーツ大会については、それまでも全国身体障害者スポーツ大会(1965年設立)と全国知的障害者スポーツ大会(1992年設立)の2大会があったが、障害者におけるスポーツの普及と障害者の社会参加推進、更にスポーツを通じた国民のバリアフリーの意識向上を目的として、全国障害者スポーツ大会として1つにまとめられ国体の中に組み込まれるようになった。

2019年の茨城県開催の国体準備段階においても前例に倣い、3大会のうちの特に障害者スポーツ大会において選手団サポーターをはじめとする支援の必要が高いことが予想され、県下の高校及び大学等に県からの協力要請がなされた。一方、現在は核家族化が進み、また、地域での広い繋がりも希薄なことから多様な人と関わる機会が少なくなっており、大学生が日常の生活において障害のある人と身近に接する機会は少なく、バリアフリーを現実問題として意識することは難しい状況にある。これらのことを踏まえ、茨城大学ではこのような障害者スポーツを介しての障害のある人とそれらを支える多くの人と触れ合う機会は、大学生にとってバリアフリーについては持続可能な社会について考える貴重な学修の機会になると考え、大学教育の一環として取り入れつつ協力参加することとした。

バリアフリーという概念は、障害のほか性別や人種、宗教など様々なカテゴリーで近年強く求められるようになってきているが、世界的に見て日本におけるバリアフリーの意識や取り組みは高い水準にあるとは言えない(勝又2008, 坂田2009)。日本は島国であり人や情報の往来が少ない環境に長く置かれていたことで、人種や宗教などの多様性が乏しくバリアフリーにおける理解の必要が特になかったことがその要因として大きいと考えられる。しかし、近年移動手段の向上やネット等の情報環境が飛躍的に発展したことによりグローバル化が急速に進み、各人が国単位ではなく世界的視野で多様性への理解を持つことが強く求められるようになってきている。2015年の国連サミットで採択されたSDGs(持続可能な開発目標、実施期間2016年~2030年)においても、種や宗教などの多様性を受け入れ、他者を理解することの重要性が謳われ、持続可能な社会に向けたゴールに向けて必要不可欠とし目標が定められている(United Nations 2015)。このような世界的な動きに対応して、日本においても共生社会の構築に向けて2016年に「障害者差別解消法」が施行され、茨城大学においても2016年の本法律の施行と同時にこれに準拠することが謳われ、2017年の全学教育機構発足とともにその傘下に置かれたバリアフリー推進室が中心となり、全学的な障害者支援の取り組みが本格的にスタートした。

バリアフリー推進室の先進的な取り組みの1つにピア・サポーターの育成が挙げられる。ピア・サポートとは、専門家などではなく同じような近い立場の仲間によってサポートすることを指すが、茨城大学における本ピア・サポーターの場合は、同じ学生という立場にある者が障害のある学生を

サポートするものである。ピア・サポートの手法は福祉・心理・教育などの分野で幅広く用いられてきた手法であり、支援される側において必要な支援が得られるということだけではなく、支援する側の学生においても他者理解の機会が得られるというメリットがあると考えられている。大学におけるピア・サポートの活用はアメリカにおいて早くから取り組まれており、その教育効果については日本における大学でも関心が高まっている（泉

表1 人の心理的成長段階による「成人発達モデル」  
(Kegan 1982, 加藤 2016, 齋藤 2009 を参考に作成)

発達段階		特徴
1	具体的思考段階	言語を獲得したての子どもの段階
2	道具主義的段階 利己的段階	自らの関心事項や欲求を満たすことに焦点があたっている。他者の感情や思考を理解することが難しい。他者を自らの欲求を満たすための道具のようにとらえている。
3	他者依存段階 慣習的段階	自らの意思決定基準を持たず、組織や社会など他者の基準によって自分の行動を決定する。自らの意見を表明することが困難。
4	自己主導段階	自らの価値観や意思決定基準を持ち、自律的行動ができるようになる。自己成長に強い関心があり、自らの意思を明確に主張することができる。
5	自己変容段階 相互発達段階	自らの価値観や意見にとらわれず、柔軟に多様な価値観を汲み取りながら的確に意思決定ができる。自らの成長と他者の成長とを相互に発達しあえる。

谷・山田 2013, 杉村ら 2006)。大学におけるピア・サポーターの育成活動については、教育的側面、すなわち支援する側の学生の成長を考えると非常に意義あるものと考えられる。表1はロバート・キーガンによる「成人発達モデル」の概念を基礎とした心理的発達段階を表したものである（Kegan 1982, 加藤 2016, 齋藤 2009）。和を重んじ組織の一員として調和を保つことを重視する日本人の場合、特に第4段階の発達が求められる場面が多くなく、この域に達している人は少ない（神馬 2017）。しかし、AI技術が様々な場面で取り入れられることが予想される今後においては、自身で判断し決定し行動できる人が求められると予想される。すなわち、発達段階における第4段階の自身の考えを明確に持てること、第5段階の多様性を受け入れ多角的な視点から物事を考え意思決定できること、これらの成長発達が十分であることが今後は特に求められ重要視すべきであると思われる。自分とは異なる立場の人への理解を育むことは座学だけでは難しく、実際に自分とは異なる人より多く触れ合うことが必要であり、ピア・サポーターなどはそれらの発達を促すための学修の機会として非常に適していると考えられる。大学でも今後は知識的な学修はもとよりピア・サポーターをはじめとする体験的学修にも力を入れていく必要があると考えられる。

2019年の「いきいき茨城ゆめ大会」学生サポートボランティア育成事業への協力参加においては、全学教育機構バリアフリー推進室が中心となり推進している茨城大学における障害者支援に関するピア・サポーター制度についての周知と発展の機会にもなることを期待するものであった。実際には、学生サポートボランティア育成事業は2017年から2年余りという長い時間をかけて準備し取り組んだが、大会自体は記録的な台風のため中止となってしまった。しかし、本育成事業は茨城大学の教育の特色であるiOP (internship Off-campus Program)<sup>1)</sup>の対象活動にもなっていたこと、更に、障害者支援ボランティアに向けて学んだことを少しでも実践に生かし大学におけるピア・サポーターへの意識を高め一人でも活動を継ぐ者が育ち今後の茨城大学における障害者支援に関するピア・サポーター制度の発展につながることを願い、大会支援に代替する障害者支援ボランティアを実施した。ここでは、「いきいき茨城ゆめ大会」の学生ボランティア育成における一連の活動内容とその成果において報告し、茨城大学の今後の障害者支援におけるピア・サポーター制度について展望する。

## 2. 活動内容

### 2.1. 活動概要

2017年、いきいき茨城ゆめ国体・いきいき茨城ゆめ大会実行委員会（以下「ゆめ大会実行委員会」）から茨城大学に要請があり、いきいき茨城ゆめ大会選手団サポートボランティア（以下「サポボラ」）の育成を大学として決定し実施した。この大会のボランティアには、一般の方が参加できる「大会運営ボランティア」が3500名、聴覚障害のある方へのサポートを行う「情報支援ボランティア」が600名、そして学生等を中心に募集する「選手団サポートボランティア」が800名必要だという計画であった。選手団サポートボランティア養成協力校として、県内16の大学、専門学校等が要請を受け、本学では当初60名程度の学生を育成する予定だったが、結果的には100名超のボランティアを育成することとなった。具体的には、育成プランの検討、ボランティア学生の募集、ボランティア学生事前指導、ボランティア実施、ボランティア学生事後指導を行った。

### 2.2. サポボラ育成要請と学内体制整備

2017年3月15日付けでゆめ大会実行委員会より、サポボラ育成の依頼が茨城大学にあり、サポボラ養成協力校として育成等に関わる事業を行うこととなった。学内実施組織としては、茨城大学社会連携センターが連絡調整、同教育学部保健体育選修及び同全学教育機構学生支援部門が学生の育成やその他実施管理を行うこととした（図1）。

本サポボラ育成を、大学として学内ピア・サポーター育成機会とし、また主体的な学びの一環として位置づけ、実施することとした。よって、単にゆめ大会に関わるボランティアを育成するのみならず、本学のiOP活動とするとともに、バリアフリー等の理解に関わる授業やボランティア実施に関わる授業などを新たに開講し、学生に様々な学びの機会を提供するとともに、サポボラのより良い育成環境を整備した。

それらと同時に、安全管理として、大会時のボランティア保険（ゆめ大会実行委員会により一括加入）の確認、育成やその他ボランティア活動時への学生教育研究災害傷害保険もしくは大学生協総合共済の加入の確認などを行うとともに、育成授業等において、事故時の対応などを組み込んだ。

また、育成準備を円滑に進めるため、担当教員が1名ずつ、障害者スポーツ大会（2017年愛媛大会、2018年福井大会）の視察を行った。

### 2.3. 募集と育成（事前指導）

サポボラに参加する学生を募集するにあたって、ゆめ大会が実施される2019年度にiOPクォーターの対象となる学年（主に2017年度入学生）を中心に募集と育成を行うという方針とし、2018年

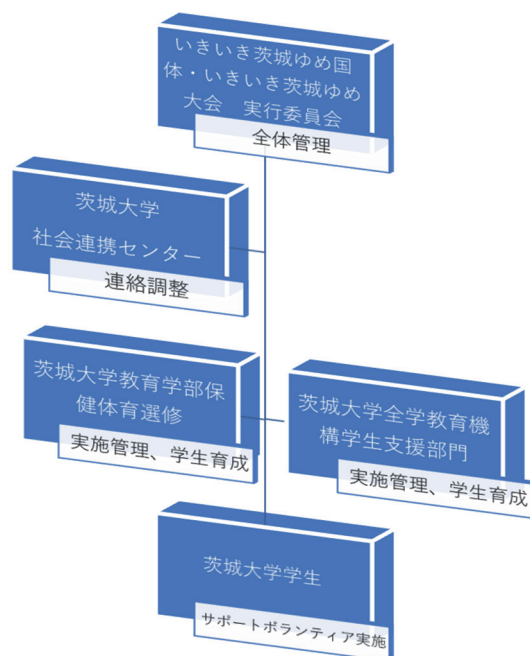


図1 ゆめ大会サポボラ組織関係図



1月、2月に学生に向けた説明会を行った。説明会の案内には、スポーツや障害者福祉に興味のある学生、またiOPの活動がまだ決まっていない学生に参加を呼び掛ける言葉を載せた。説明会では、大学側からは主に、ゆめ大会のボランティア活動とiOPの認定関係、学内でのピア・サポート活動等について説明をした。説明会には茨城県「国体・障害者スポーツ大会局障害者スポーツ大会課」の担当職員が来学し、ゆめ大会の概要や選手団サポートボランティアの役割等について説明が行われた。また、これまでの障害者スポーツ大会での選手団サポートボランティアの活動の様子などを動画で流し、この貴重な体験を通して得られるものについて学生に訴えかけた。このように募集の段階で学生に

対し「単位の取得」と「貴重な体験」という2つのメリットをアピールできたものと考えられる。次に、参加を希望した学生に対し実施した、当日までの育成プログラムについて概説する(図2)。まず、サポボラのための育成講座として、障害者支援概論や、バリアフリーやアクセシビリティ等の考え方を学ぶ基盤教育科目「人間とコミュニケーション」を2018年度及び2019年度に新たに開講した。講義形式だけではなく、車いす等を利用した支援実習、手話(図3)や要約筆記などの体験等、実践的な学修を実施し、また、その講座を受講できなかった学生のために、ゆめ大会直前の2020年8月と9月にも育成講座を実施した。さらに、当日の動き方等の最終確認をするための事前指導を2020年9月27日に実施した。そこでは、茨城県の担当職員も参加し、大会での活動に必要な持ち物の配布、また参加学生との質疑応答など、学生が抱える疑問や不安への対応を行った。

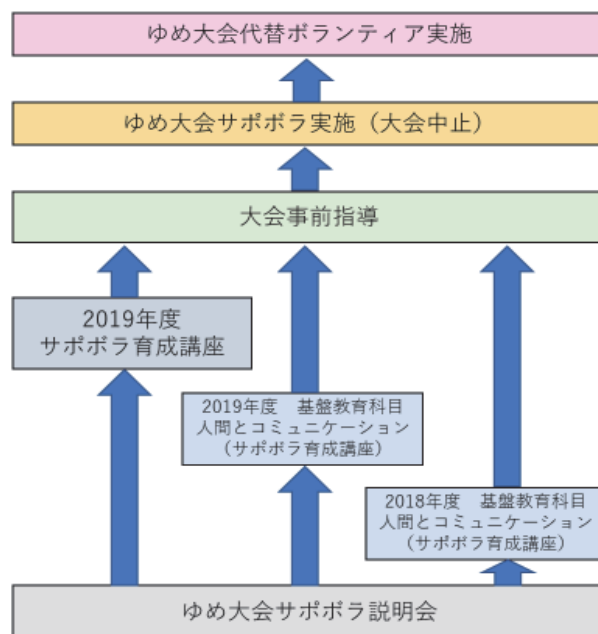


図2 サポボラ育成教育関係図



図3 サポボラ育成講座での手話の練習風景

これら育成により、大会前のサポボラ参加登録学生は、104名となった。所属学部の内訳は以下のとおりである（表2）。本学の5学部すべてから参加学生を集めることができた。

表2 サポボラ参加登録学生所属学部内訳

人文社会科学部	教育学部	理学部	工学部	農学部
22名	57名	4名	11名	10名

また、この104名は競技種目ごとに担当が割り振られた。ゆめ大会では、正式競技は13競技、県内7市15か所で行われる予定だったが、本学学生が担当するのは4競技、主に3か所の会場であった。したがってそれぞれの会場に向かうバスへの乗り方や参加学生の確認の仕方、集合場所等、最終事前指導では細かいところまで確認をした。さらに、それぞれの競技で、どの都道府県の選手団を担当するかが決定したところで、ゆめ大会本番までに応援旗を作成することとなった（図4）。大きな白い布に、担当する都道府県の特徴の絵や応援する言葉を、担当学生が協力して書いていった。担当する選手団のことを思い描きながら時間をかけて応援旗を作るこの作業自体が、サポボラとしての意識を養うために大きな役割を果たしていたと考えられる。



図4 作成した応援旗

#### 2.4. 代替ボランティアの準備と実施

応援旗も完成し、当日の準備確認をしていたところ、実際の活動が始まる前日である2019年10月10日に、ゆめ大会実行委員会から台風の影響によりゆめ大会の全日程中止が決定したとの連絡が入り、直ちにサポボラ学生に中止連絡を行った。

中止となってしまったこのゆめ大会でのボランティア活動をiOPの対象活動として単位取得を目指していた学生もいること、また対象学生が事前指導を含めこれまで学んできたことを生かせる場を作るべきではないかとの考えから、大学としては、すぐに代替ボランティアを実施することを決定し、2019年10月16日、対象学生に向けて代替ボランティアについての説明会を行った。実際に茨城県における台風19号による被害は甚大なものになっており、特に本学がある水戸市では、自治

体の混乱が見られる状況で、ボランティアの受け入れ先の選定は難航した。また、本事業においてこれまで行ってきた事前指導を生かすために、代替ボランティアの内容は障害者との関わりが体験できることを条件とした。水戸市近隣の市町村や団体等と調整を重ね、条件に合うボランティアの受け入れ先を開拓した。説明会の時点では、7か所のボランティア受け入れ先を用意し、学生の希望を調査した。

代替ボランティアへの参加を希望した学生は49名となり、さまざまな受け入れ先でボランティア活動を体験することが出来た。実際に活動したボランティア先とその内容は以下のとおりである(表3)。

表3 代替ボランティアの実施内容一覧

受け入れ先	ボランティア内容	支援対象者	参加人数
茨城県立あすなろの郷 (障害者支援施設)	「あすなろまつり」の運営補助	中程度から重度の知的障害や精神障害のある方	10名
茨城県立水戸飯富特別支援学校	歩く会のサポート	軽度から重度の知的障害やその他障害のある児童生徒	11名
茨城県東海村「にじいろコンサート」 (障害の有無に関わらず、みんなが音楽を楽しむために定期的に行われている音楽コンサート)	コンサートの運営補助	高齢者やさまざまな障害のある方	9名
就労移行支援作業所 NPO法人 ドリームたんぽぽ	イベントでのパン販売の補助	軽度から重度の知的障害や精神障害のある利用者	10名
茨城県特別支援学校体育連盟スポーツ競技大会 (特別支援学校の中等部・高等部の生徒の陸上記録会)	陸上記録会の支援補助	軽度から重度の知的障害やその他障害のある生徒	7名
茨城県立水戸飯富特別支援学校高等部	高等部3年生と茨城大学教育学部学生との大学訪問による交流会および共同学習会の支援補助	軽度から重度の知的障害やその他障害のある生徒	2名

## 2.5. 事後指導

代替ボラ参加者は全員が事後指導にも参加した。参加学生の所属学部は表4のとおりである。

表4 代替ボランティア参加学生の所属学部一覧

人文社会科学部	教育学部	理学部	工学部	農学部
6名	32名	3名	4名	4名

もともと対人支援への興味が強いと推測される教育学部の学生が最も多いが、本学の5学部すべ

ての学部から参加者が出ることになる。このことはこれからの本学におけるピア・サポート活動の広がりやその定着を考えたときに、大きな意味を持つと考える。

すべての代替ボランティアの活動が終了した後、少人数に分けて、1時間程度事後指導を実施した。はじめに障害者支援に関する講義をした後、学生それぞれが代替ボランティアで体験したことをグループになって話し合うことでその体験を共有し、ほかの学生の意見や感想も取り入れて自分の体験をさらに深化させることを目的としてグループワークを行った。グループはなるべく異なる場所でボランティア経験をしたメンバーで構成した。まずグループごとにこのグループワークでの目標を決め、一人ずつボランティアでの体験を話し、お互い疑問に思ったことを質問する、感じたことを伝え合う等の時間をとった。自分が体験していない内容を聞いて驚く場面や、うれしかった体験を思い出し共有しあう場面も見られた(図5)。



図5 事後指導風景

次に事後指導を行った際のワークシート、そのあとに回収したアンケート、また iOP 認定のための活動報告書等から、学生が得たものについて検討する。

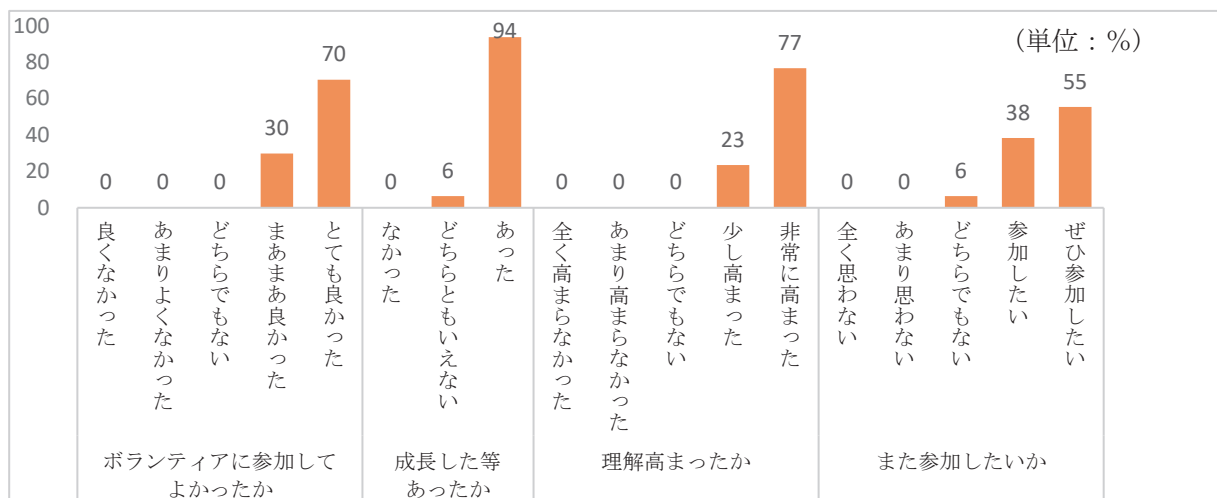


図6 代替ボランティア事後指導アンケート結果(抜粋)



はじめに、事後指導後にとったアンケートの結果について報告する（図6）。ボランティア活動に参加したすべての学生が、参加してとてもよかった、もしくはまあまあよかったと回答している。自由記述の回答や事後指導での発言等から推測しても、学生がボランティア活動で体験したことは楽しいことや嬉しいことばかりではなく、どうしたらいいかわからないことや困ったこと、不安だったこと、つらかったこと等も多々経験したと思われる。そういったネガティブと感じ取れる体験も含めて「参加してよかった」と感じる事が出来ているということは、次の設問で92%の学生が「成長した点があった」と回答していることと大きく関連しているだろう。ボランティアに参加したときの体験のみではなく、事前指導、事後指導も含めて、自らの成長につなげることが出来て初めて「参加してよかった」という実感を持つことが出来ると考えられるのではないかと。

次に、アンケートや活動報告書の自由記述に書かれていた学生の言葉から報告する。多くの学生において、実際にさまざまな人たちと触れ合う経験をしたことで、「対応や声掛けの難しさを改めて実感した」等の記述が見受けられ、ボランティア体験を通して障害者と関わることによって、多様性を受け入れ積極的に関わる事がこれまで考えていたよりも実は難しいことであることを体感出来たのではないかと推察された。知らない世界を知る、そして体験して様々なことに気づくことで改めてその世界での難しさを知る、というところまでは今回の一連の育成プログラムである程度達成できたと考えられる。さらにその先の、どうしたらその難しさを乗り越えて自分の世界を広げられるかという段階まで達するには、長期的なサポート活動等を経験することが必要だろう。また、ボランティア受け入れ先の各団体（学校やNPO法人など）が取り組んでいる活動自体への気づきも多く記述されていた。コンサートのボランティアでは「一瞬で一体になる方法としての音楽のちからを感じた」「言葉以外のコミュニケーション手段もたくさんある」という気づき、歩く会のボランティアでは「一緒にきついコースを歩くという行為自体がコミュニケーションになること」への気づきなどがあった。さらに、施設に預ける側の家族の気持ち、日々生活に関わりながら指導する先生方の姿なども、感じ取り学んでいる学生もいた。「事後指導を受けることで振り返りをきちんとすることができた」という記述もあり、事後指導で体験を深化させることまでを含めて今回のボランティア育成事業であったということを再確認することができた。

なお、事後指導の後、活動報告書を提出し、iOPとして認定を受けた学生は32名、ボランティア活動として単位認定が認められた学生は31名であった（重複を含む）。

## 2.6. 活動スケジュール一覧

茨城県から本事業の参加要請を受けた2017年から、事後指導までを終えた2020年1月までの活動スケジュールを表に整理した（表5）。

表5 ゆめ大会サポボラ育成事業における本学の活動

実施日時	題目	目的、内容
2017.3.15	ゆめ大会協力要請依頼	ゆめ大会実行委員会より本学学長へ依頼
2017.6.21	ゆめ大会第1回養成協力校会議以降、第5回まで実施	ゆめ大会の選手団サポートボランティア養成協力校（16校）と茨城県の連絡会議

2017.10.28～30	愛顔つなぐえひめ大会視察	第17回障害者スポーツ大会を視察
2017.11.6	県と本学との打ち合わせ	育成年次スケジュール等について確認
2018.1.24	サポボラ説明会①	人・教・理・工学部1、2年生向け
2018.2.13	サポボラ説明会②	農学部1、2年生向け
2018. 第2クォーター 夏季集中講義	基盤教育科目「人間とコミュニケーション」開講	障害者とは、バリアフリーとは等、ボランティアのための育成講座
2018.10.11～14	福井しあわせ元気大会視察	第18回障害者スポーツ大会を視察
2019. 第1、第2クォーター、 夏季集中講義	基盤教育科目「人間とコミュニケーション」開講	障害者とは、バリアフリーとは等、ボランティアのための育成講座
2019.7.17	ゆめ大会ボランティア本登録者説明会	今後のスケジュール等について
2019.8.7、9.27	ゆめ大会ボランティア育成講座	障害者とは、バリアフリーとは等、ボランティアのための育成講座
2019.9.17	ゆめ大会参加選手の壮行会	ゆめ大会出場予定の大学関係者2名の壮行会にサポボラ3名が参加
2019.9.27	ゆめ大会サポボラ事前指導	実際の活動での動き方の確認等
2019.8～10	応援旗の制作	割り振られたグループごとに、担当都道府県の応援旗を制作
2019.10.11～14	ゆめ大会	中止
2019.10.16	ゆめ大会代替措置についての説明会	ボランティア受け入れ先を提示 参加希望を調査
2019.10～12	各種代替ボランティア	県内6か所でボランティア活動を実施
2019.12～2020.1	ゆめ大会代替ボランティア事後指導	少人数のグループに分かれて、ボランティア活動を振り返るワークを実施

### 3. まとめ

今回の第19回全国障害者スポーツ大会(いきいきいばらきゆめ大会)における学生サポートボランティア育成事業において、その制度の説明から事前指導を経て、本学では104人の学生がボランティアに参加することを決意し準備を進めていた。残念ながらゆめ大会自体は中止になってしまったが、その中の約半数の49名もの学生が、さまざまな地域の活動にボランティアとして参加することが出来た。

本事業を受け、大学としての動き方を振り返る。本事業を担当することになった教職員だけではなく、参加学生募集の段階から、育成講座、選手の壮行会等、大学全体を巻き込んだ活動になったことは評価できるのではないかと考えられる。また本学ではディプロマポリシーにおいて、社会人としての姿勢や地域活性化志向に関する知識・能力を備えることを掲げており、地方国立大学法人の役割として、地域に関心を寄せた教育や研究活動に学生とともに取り組むことは非常に重要であり、今後も力が入られていくものと思われる。それらも考えると、このような外部からの大きな事業を請け負うにあたり、大学組織として全体に関心をもち積極的に関わっていくことは、学生の教育という観点のみならず、大学としての成長にもつながるものと考えられる。一方、学生の育成という点では手探りの部分も大きかったように思われる。本事業を開始した当初(2017年度)は、

前述したようにゆめ大会開催時に3年次生となる学年を募集対象として想定していたため、そこに合わせた全8回の実践的な育成講座を開設した。しかしその他の学年、特に2019年度の新入生は、開設された育成講座を受講できず、ゆめ大会実行委員会が作成したボランティアのための養成講座テキストに基づく短時間での講座を受講する形になってしまった。サポボラ参加可能な対象としての門戸は広がったが、実際にサポボラを行うにあたっての知識や技術には差が出てしまった可能性は否定できない。この育成事業は準備から実施まで2年超という長期間に渡るものであったが、それでもすべての参加学生に一定のカリキュラムで育成教育を行うという点においては足りない部分があったと考えられる。しかし結果的に代替ボランティアとして約半数の人数での活動になったため、事後指導も含めてある程度その差を補うための丁寧なサポートはできたものと思われる。

さらに、本事業での経験をこれからどのように学内で生かしていくかについて検討したい。本学には元々ボランティア活動に関するサークルがいくつかあり、そういったところに普段から所属し、活発に活動している学生もいる。ただ、今回のように45年に1度という大きなイベントをきっかけに、ボランティア活動や障害者理解という分野に興味を持ち、一步踏み出した学生もいるだろう。そういった学生の貴重な体験をそのままにせず、しっかり学生の中に意味のあるものとして留めることが事後指導での大きな目的であり、アンケートからもそれがある程度達成できたものと考えられる。また、広島大学による大学生のピア・サポーターにおける活動動機に関する調査研究によると、参加動機、継続動機ともに最も多い要因は「学び、出会いへの期待」であった(藤原ら 2013)。これらから多くの学生はピア・サポーター等のボランティア活動において、具体的な支援スキルを学ぶというよりは、内面的な成長や出会いの場を求めていることが考えられる。実際に本事業においても、単位として取得するための活動としてとらえていた学生だけではなく、自らの成長につながる体験を求める動機をもち参加した学生も多かった。そういった機会を継続的に提供していくという、大学としての役目を果たす1つの選択肢が、学内でのピア・サポート活動であろう。1度きりのイベントとしての体験ではなく、学生本人のさらなる成長につなげられるような体験的な学修の場として学内でのピア・サポート活動を推進していく必要がある。その運営に当たっては、本事業で得られた知見を踏まえ、今回の事後指導のように教職員が、学生の感じ取った体験の深化や定着を促すサポートをしながら、学生の主体的な活動としてのピア・サポートを見守るという支援を進めていきたい。

## 注

- 1) 茨城大学では、学部3年次の第3クォーターを「iOP (internship Off-campus Program) クォーター」と名付け、原則的に必修科目を開講せず、特に学外における主体的な学びを促す期間としている。

## 引用文献

藤原美聡・石田弓・児玉憲一. (2013) 「大学生のピア・サポーターにおける活動動機に関する調査研究」  
広島大学保健管理センター研究論文集, 29, 25-34.

泉谷道子・山田剛. (2013) 「体系的なピア・サポート活動による学生の学びと成長」大学教育実践ジャーナル

ナル, **11**, 61-67.

加藤洋平. (2016) 「なぜ部下とうまくいかないのか」日本能率協会マネジメントセンター.

神馬征峰. (2017) 「アドボカシー実践に必要な2つの成長」日本健康教育学会誌, **25(2)**, 107-111.

勝又幸子. (2008) 「国際比較からみた日本の障害者政策の位置づけ-国際比較研究と費用統計比較からの考察-」季刊社会保障研究, **44(2)**, 138-149.

Kegan, R. (1982) *The Evolving Self*, Harvard University Press, Cambridge.

齋藤信. (2009) 「Kegan の構造発達理論の理論的検討 —理論と発達段階の構成に着目して—」名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, **56**, 47-56.

坂田仰. (2009) 「戦後日本における障害者法制の軌跡」情報の科学と技術, **59(8)**, 391-396.

杉村和美・小倉正義・加藤大樹・松岡弥玲・山田奈保子. (2006) 「ペア相談と学生の主体性を取り入れた大学でのピア・サポート活動」青年心理学研究, **18**, 51-62.

United Nations. (2015) 持続可能な開発のための2030アジェンダ

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000101401.pdf>, (2020年7月30日閲覧).